

はしがき

本書のサブタイトルに付された「非主要」という言葉に、どのようなイメージを抱くだろうか。おそらく良いイメージを抱く人はあまりいない。非主要だけでなく、「二流・三流」についても同様であろう。それが口に出されるかともかく、これらの言葉は組織の序列や人の評価に付されがちな言葉である。そして、文部省はどの時期においてもこのような評価を受け、公然とそうのように言われてきた。もつと言えば、中央各省の中で最下層に位置づけられてきたとさえ言える。これは政界・官界や、官界を目指す学生だけでなく、社会に広く共有された認識であった。

しかし、だからと言って、それをもって文部省を研究する意義が薄いということにはならない。逆である。文部省という鏡を一枚加えて近代日本の官僚制を覗きこむと、主要官庁たる内務省や大蔵省では見えてこなかった側面が新たに現れ、これまで内務・大蔵両省から見られてきた官僚制の姿を相対化できるのである。

本書では、各時期の文部省の人事と、それに伴う官僚の専門性の変質を検討することで、官僚制が大きく進展していく内閣制度導入（一八八五年）前後から一九〇〇年代初頭までの約二〇年間の文部省の特徴を明らかにする。個別行政としての文部省の特徴だけでなく、近代日本の官僚制をより広域に見通し、それが内包していた問題や特徴を示す。本書の趣旨を端的に記せば、文部省の人事と文部官僚の専門性は、官任用制度に大きく影響を受けるが、それがかえって文部省の特徴を鮮明に浮かび上がらせることになった、と言うことである。官任用制度が整備されていく過程の時期だからこそ、文部官僚のあるべき姿に関して教育雑誌などのメディアで様々な議論が行う余地があった。

本書は二部構成からなる。第Ⅰ部では、近代日本における官僚任用の全体的な流れを踏まえて、文部官僚の特徴を論じる。第Ⅱ部では、官僚の職種や職務と、それに対する評価といったトピックごとに文部省を論じる。基本的には第Ⅰ部の官僚制の動向と文部省の変容を踏まえたうえで、第Ⅱ部へ読み進められることを想定している。しかし、たとえば教育雑誌による文部官僚の評価を先に掴みたい方は、第Ⅱ部第7章から読み始めてもまったく問題ない。

本書は、博士論文を元にしたいわゆる学術書であるが、一方で多くの方に手にとってほしいと考えている。このため、博士論文から表現や論理構成を可能な限り修正し、説明を加えた。また本書では、官僚の顔が見えるような記述を心がけた。たとえば、文部次官の辻新次と文部編輯局長の伊沢修二の殴り合いの喧嘩を呆れながら眺める新人官僚時代の沢柳政太郎（第1章）や、文部省の重要業務である学事巡視を拒絶し、後悔する依田学海（第4章）などの諸光景を想像しながら読み進めていただければと思う。

最後に、本書を現代的な問題に引き付けたい。現在の霞ヶ関内の状況は厳しい。長い労働時間の割に、それに見合う待遇を整備できておらず、他の雑務に時間が割かれ、政策立案などのやりがいのある仕事にエネルギーを注入できないという。結果として、仕事への充足感が得られず、現役官僚の離職が増え、キャリア官僚の志望者数は減少している。行政機関全体で質の高い人材の確保が急務となっている。官尊民卑の時代たる明治期を取り扱う本書から見ると、まさに隔世の感がある。また、ある学会の討論では「官僚が優秀である必要があるのか？」というコメントを聞いた。もちろんそのコメントをした研究者は、あえてそのように挑発的な問題提起をすることで議論を盛り上げようとしたのであるが、歴史学を研究する筆者には、「質の良い人材を行政機関へ」という近代以降の日本の前提を問い直すようなコメントに思えてならなかった。近代日本官僚制の整備過程を扱う本書を繙くことで行政機関の現状に思いを馳せ、現代官僚制を相対化するうえでいくらかの示唆を見出していただけるとしたら、筆者にとっては望外の幸せである。